

はじめに——見せかけの「一律」社会から逸脱するために

はじめまして、モーリー・ロバートソンです。職業は国際ジャーナリスト、DJ、ミュージシャン。最近、地上波テレビへの露出が増えているので、「モーリーは遅れてやってきた、大器晩成きばんせい」なんて言われることもありですが、自分の意思でメインストリームを外れて、アンダーグラウンドで活動していた時期が長いだけで、ミュージシャンとしてソニーからメジャーデビューしたのは18歳の時です。

僕の父親はスコットランド系アメリカ人ですが母親が日本人なので、子どもの頃から日本の学校に通っていました。とはいえアメリカで生活する機会も多かったため、少年時代は「それぞれの国で美德とされることが違いすぎる」というギャップに苦しみました。そもそも日米両国の教育システムが違いすぎているし、文化があまりにも異なつたのです。

とりわけ戸惑つたのが異性との交遊、男女関係。早く大人になることが奨励されるアメリカに対して、僕が10代を過ごした昭和の日本では「お見合い結婚こそが正しい結婚で、自由恋愛は進歩的な若者がするもの」ぐらいの認識でした。制服を着た高校生が商店街で手をつないで歩くなんてことは、断固として許されない。何もかもが、この延長線上で食い違っていた。「こっちの日常があつちでは非日常」で、サイケデリックなまでに環境が不条理に満ち満ちていました。

「この世界」と「この世界以外」の現実があつて、両者をブリッジする必要があり、ある段階までは真面目にどちらかに合わせようとしたのですが、アメリカでは「しょせん東洋人」として差別され、日本では「やっぱり外人だ」と言われ、「なんじゃそりゃ? どうすればいいんだ!」と結局傷つく。両親は、ほぼ離婚に近い別居状態。そんな心が折れそうになつたところにパンクとの出会いがあり、「よし、やってやれ。パンクの精神で受験システムをハッキングだ!」という闘志に燃え、東大とうだいとハーバード大に同時合格しました。

日本では名目上「一律」と言つて、みんな同じルールを平等に守らなくてはなりません。その一律の基準を満たせない人は、潔癖なマジョリティーによる懲罰や差別の対象になつてしまふ。僕はティーンエイジャーだった頃、「外人の価値観」で行動したために日本社会の田舎のムラ社会むらまがひ（広島県や富山県）ではルールを守らない厄介者として排除されていました。では、どうやって境遇を逆転させたのか? 僕はやっぱり「ステルス戦闘機」になつてリーダーから消えました。

具体的には、受験勉強をして東大を目指し、模試とかテストの成績がいいという状態を作り

ました。「あいつ、外人なのに真面目にやっってるなあ」という印象が広がると、それで称賛される。すると、当初は自分の言動をしらみつぶしに監視していた教師たちが褒める側に回った。当時の僕は学校で禁じられていたバンド活動もしていましたが、成績が良くなった途端、教師から「こんなに成績がいいんだから多少、学校の外でバンドをやっても許してやろう」と、急に特例扱いされたんです。「一律」から頭一つ飛び抜けて、やるべき課題をきちんと一つ一つ満たしていくと、ある段階で急に付加価値が付き、いきなりエリート扱いに化ける。これを「手のひら返し社会」と呼んでもいいでしょう。

日本は、みんなと同じスタート地点に立ち、同じ制服を着て同じ給食を食べ、平等に頑張つて、根性を出して、テストの点数が伸びたということが美德とされる社会。けなげでひたむきな努力こそが偉い。そんな価値観の中で、みんなと違う人間（僕の場合、父がアメリカ人だから顔からしてみんなとは違う）が努力していると、「あいつは外人なのに受験生として他の日本人より頑張っている」と、勝手に世間が感動した。

僕は受験に全然興味が無いのに、システムをハッキングしてやろうと思いつき、最高峰を目指して計画を練ったら、だんだんうまくいくようになった。日米の文化の軋轢がきっかけで自分の中にある固有値を見つけたわけです。みんなから排除される、居心地の悪い自分の特性を隠すんじゃなく、『みにくいアヒルの子』のように、ありのままの「Let's Go」な自分を解放した。

それが僕の日本社会における成功術の基本形。これが30何年間のキャリアの中で繰り返されていくようなところがあります。

こういう話をする時、時には「それができるのは、そもそもモーリーさんが自己実現するだけの才能を持っていたからでしょ」とやっかまれることもあります。まるで「抜きんでた才能の持ち主なんだから、少々の差別やハラスメントを受けても我慢しなさい。差別する庶民側の気持ちも理解しなさい」と言われているような感じ。

そんな水掛け論への返事は簡単で、「じゃあ勝手にしろ」です。人をやっかむばかりで自分を変える努力を最初から放棄するのなら、ネットの匿名掲示板に張り付いて、ネット右翼でも左翼でもやっていればいい。「在特会」でも安倍反对デモでもいいから、そこに行きなさい。自分がないものを持つ他人をひたすら貶めることにエネルギーを注ぐ人間に用はないよ。

僕はこの本で個人的な哲学から社会への違和感、そのソリューションの提案まで、さまざまなたテーマをざっくばらんに語っていきます。タイトルにある「悪くあれ！」という言葉は、他人が決めた潔癖な「暗黙のルール」とらわれず、「社会の窮屈なグリッド（枠組み）」からはみ出すことを恐れなくてほしいという意味を込めています。

この本でこれからいろいろと言いますけども、何を言っても通底にあるのは「みんな、もっ

と自由に、創造的にドカーンと生きてしまえ！」というメッセージです。ただし、自由のリスクは必ず引き受けること。冒険的なワイルドウエストの歩き方とは何か、そう生きるには最低限何が必要か……本書は、その指南書です。

トランプ大統領に敬意を表して

世界の中核にあるべきアメリカの大統領がその責任を放棄し、強固な支持層は彼が日々発信する暴言ツイートやルール違反を讃え続ける。2016年アメリカ合衆国大統領選挙を経て、そんな日々がやってきました。

大統領は事実確認もないうまま、寝る前にTwitterを使ってCNNというメディアや北朝鮮という国家を気分次第に名指しで攻撃。朝起きてすぐにツイートをチェック。炎上しているさまを見てニンマリする……なんじゃそれは？

「無法者国家アメリカ」は、世界の新たなお手本になりつつあります。

そんなトランプ大統領に敬意を表して、この本では「ファクト・フリー（＝僕が考えていることを責任感なくおしゃべりする）」スタイルでいきたいと思います。人知れずダジャレを言ったとしても、元ネタとなる事象の説明はいたしません。いわばトランプ式のギャングスタ・パライイスです。

居酒屋のメニューに「あぶりレバ刺し」というものがありますよね。今は食品衛生法でレバ刺しが禁止になってしまったので、店側がレバ刺しを食べたい人とするんで「今、見ています

よね？ あぶりますよ？」と言いながら火の上をちよつとだけくぐらせて「焼いたこと」にするけど、本当はただのレバ刺し。本書もそんな「生」な感じになるといいなと思っています。

あるいは遠くない昔、落語家や役者は「フグの毒をなめて舌をびりびりさせてハイになる」という遊びをやっていました。でもそれは、本当にいつ致死量までいくか分からないロシアンルーレットで、「オウンリスクで死んだとして、何が悪いんだ？」という「粹」の一種だったのですが、最近の世の中には、そういう刺激が足りない気がしています。

この本の「毒」を食べて死人が出たとしてもオウンリスク。格安の旅行代理店が破綻したら、ハワイからは自力で帰ってください。

水平化する世界、「安定」の幻想

「今の時代、キレイキレイに生きること何の楽しみがあるのか？」と特に若い人たちには言いたいです。世界中の新興国や途上国からもすごい才能を持った人たちが現れ、もしかしたら5年後にはアフリカのモザンビークから天才プログラマーやベンチャーの起業家が現れるかもしれない。世界中が水平化して、ものすごい勢いで競争している中、「揺り籠から墓場まで」保障される経済構造がすでになくなっていく日本で、どうしたら自分の雇用が確保できて、30年以上のローンを払えるのか？

今の日本の銀行は、アメリカの「サブプライム住宅ローン危機」に近い状態です。以前自分の出演した番組で、銀行がサラリーマンを相手に「正社員なら物件を買えます」「オーナーになりませんか？」などと言い、アパートやコインランドリーを購入させてローンを組ませるというニュースを扱ったことがあります。

銀行は「物件自体が担保になります。リスクはありません」「賃貸収入を得て、何年かで黒字になりますよ」というセールストークで、3つも4つもアパートを買わせるわけです。結果、口車に乗せられたサラリーマンの手元には支払えるはずのないローンだけが残ってしまう……。

これは、銀行からお金を借りる人がいなくなったので、経済弱者に「破産したら自己責任」というリスクを押し付けて金を貸す、サラ金のようなやり口なんです。つまり、アメリカのサブプライム住宅ローンと同じ仕組みです。

日本のある世代は、昭和の30〜40年間にあつた繁栄期の幻想を引きずって、事態が進んで環境が激変していることを全く無視し、認知拒否・現実逃避しているように思えます。好奇心・向学心が薄く、何事に対しても受け身。いまだに「堅実にやっていたら報われる」という幻想にとらわれているのです。

そんな人たちは、「まだ大丈夫なんだ」とか「親の世代は公務員やサラリーマンで定年まで働いたから、自分も同じようにすればいい」と思い込んでいます。そこへ「そのとおりです、頑張ってください」と言って、実は親の世代よりも相当大きなリスクを押し付け、自分たちのリスクヘッジをしようとする捕食者の金融業界が忍び寄ってくる。これがまさにサブプライムの構造なわけです。

グローバルズムで製造業や下請けが全世界へと流出した状態だと、経済構造がどうしても保守的になり、「こつこつやって自分を殺す」ことでリスクを避けようとしています。そして、まるでリスクフリーな未来が待っているかのようなプロパガンダ（政治宣伝）を金融業界と銀行がやっています。

グローバルズムを徹底した結果、各国の政府は海外からの投資を呼び込むために、いくらネガティブな副作用があろうとも、金融に対する規制はとにかく緩和していくしかありません。そうすると、そこに法のストレスで生きる人、「訴えられても逃げ切れればいい」という人が参入してきます。つまり経済無法状態が訪れているのです。

アフリカの最貧国、モザンビークのバブル

ある時、Twitterで面白ニュースを発見しました。

日本の大学の研究員がモザンビークに住んでいた頃、飲み屋で知り合った人に家政婦を任せたら、留守中に金庫を開けられ70万円近くの現金を盗まれてしまった。家政婦が金庫に手を出している現場が監視カメラに映っていたので、犯人はすぐに逮捕されましたが、盗まれた70万円はあつという間に車や土地に化け、結果、村全体がバブル状態になったそうです。モザンビークは世界最貧国だから、盗まれたお金が巡り巡って、村全体の景気が良くなったというわけです。

このネタを知った時に僕が思ったのは「盗つ人バブルの村から生まれた子どもが、バブルをきっかけにきちんと大学へ行ったりYouTubeで学習したりして、何カ国語もしゃべれるすごいプログラマーやハッカー、ベンチャー起業家になるなど、地球レベルの下克上げくじやうが起きる……そんな未来があるかもしれない」ということ。今はそういう世界です。

そんなパラダイムシフトが起きているというのに、「アパートのオーナーになりませんか？」と甘い言葉を囁くサブプライムローンもどきのビジネスにからめ捕られるサラリーマンというのはあまりに鈍だまくさいし、本当に外の世界のことを分かってない。要は免疫がなすすぎの状態です。

今は、免疫がないどころか、子どもの頃にさまざまな雑菌、ウイルス、飢餓や紛争、栄養失

調、そういうものに囲まれた世界で育ったハングリーな人たちがすごい知恵をつけてくる世の中です。もはや平和ボケも通用しない。

こんな時代に潔癖になって、放射能が怖い、ヒ素が怖い、ベンゼンが怖い、大麻が怖い……そんなことでどうするの？（でも、ケタミンは怖がったほうがいいよ）つまり、もう「安全な日本」という前提は崩れているんだ！ という話です。

タランティーン映画のような世界

ニュースの話題をもう一つ。

2017年の春ごろ、お年寄り向けに新聞広告を出していた格安の旅行代理店「てるみるぶ」が破産しました。同社は150億円の負債を抱え急に機能しなくなり、ハワイなど海外にいた旅行者たちはホテルから「宿泊費が払われてないので、もう1度払ってください」と言われたり、空港で航空券が発券できず帰れなくなったり……そんな被害が約9万人にも及びました。

旅慣れた人たちは「てるみるぶは安すぎて怪しい。ここで買うぐらいだったら、航空券は間違いないようにちゃんとしたルートで手配して、宿はAirbnbとかAgodaで粘って探そう」といった具合に他の選択肢を持っています。自分で調べてプランを組めば、ツアー旅行にはな

い自由さも手に入れることができる。そして、そういうネットリテラシー（インターネットを使いこなし、有益な情報を得ることができる能力）を身につけているのは若者です。

では、若者の代わりに誰を餌食にできるか。彼らが目をつけたのはお年寄りでした。てるみくらぶは、「2〜3万円で韓国に行けますよ」「40万円あれば、夫婦で1週間スイスへ行けます」などと言って、年金生活者の手の届く範囲のアジアやヨーロッパへの旅行をちらつかせました。リテラシーの低い（情報を精査、比較する能力がない）お年寄りたちを勧誘して年金からむしり取り、うまいこと回せていけるはずだったのが、なんと負債が150億円まで膨れ上がり、あつという間に倒産、突然死してしまいました（その後、てるみくらぶの社長と経理担当者は銀行に対する詐欺の疑いで逮捕されました）。

てるみくらぶが被害者に対して払い戻したのは、投資額のたった1パーセント。スイスに行くのに40万円を払ったというお年寄りに返ってきたのは、たったの4000円。そもそもよく考えたら、バックパッカー旅行ならまだしも、40万円なんていう価格で、夫婦で1週間もスイスになんか行けるわけがないのに！

ストリートスマート（現場対応力の優れた人）だと、旅行の適正な価格が分かるわけです。「2万円で開催旅行」と聞いたら「航空券だけでも2万円はやばい。安かろう悪かろうに決まっている」と思うし、「そんな値段じゃ、航空・観光業界で働く人たちの賃金を不当に圧迫しちゃ

うじゃん」ということを考えます。そこを全く考えない人たちが、新聞広告を読んで「安全・安心の旅」「うちは大量にチケットを買っているから安いのです」というような安易な口車に乗せられてしまったわけです。

ここからもサブプライムの悪意を感じます。リスクを避け、騙されたこともなく、悪意に対して免疫が全くないお年寄りたちが、人生の後半、たそがれになって悪徳業者のカモになっている。テレビだけを観てお年寄りになってしまった人は、善意のイノセント。純白のアペレージ。グッドなカモです。その羊たちの沈黙、言い返さない人たちを、これからはオオカミたちが食べていきます。そしてそのオオカミたちもお互いを食い合い、異常に平均寿命の短い世界になる。まさにタランティーノ映画のような世界がやってきているんです。

危険を知らなければ、正しく恐れることが出来ない

では、若者はどうだろうか。過剰なノースモーキングの風潮から見えてくるものがあります。公共の場での全面禁煙の流れは別にして、年配者には当然喫煙経験者が多く、タバコが悪害に分かるからこそ「それを根絶しなくてはいけません」と言えるわけです。タバコを吸うと体に悪い、脳に悪いというのは間違いない。だけど「じゃあ、なんで昔はみんな吸っていたんだろ？」という疑問も浮かんできます。リスクはあるけど、フィールグッドできたからではな

いの？

何もかも禁じられた潔癖な環境で育った若者が20歳になった時、イノセントなお年寄りと同じぐらい免疫も知識もないなんて、モロにグッドなカモですよ。

また、昨今未来ある若者に忍び寄る麻薬汚染問題。パーティドラッグとして若者に人気のMDMAは無法状態で、ほとんどのものはギャングが作っています。アメリカのドラマ『ブレイキング・バッド』のように専門的な知識を持つ科学者が作るならまだしも、大抵は素人が混ぜ物入りで作るので、それを摂取した子どもがどんどん死んでいます。

イギリスではこの事態を重く受け止め、地元の警察はクラブで子どもも持っている薬物の純度を測るようになりました。混ぜ物入りのMDMAで子どもを死なせないために。「MDMAが合法かどうか」という問題以前に若者に無駄死にしてほしくないから、警察は取り締まるだけじゃなくて譲歩する。現実はそのようなものです。冒険を無闇に罰さず、ある程度の非合法行為や失敗を許して、学ばせることで成熟を促す。僕は、そういう世の中が好きなんです。

それに、今さら合成麻薬を取り締まったところで、製造レシピが公開されつつあるし、作りたいたい人はお手軽に作れるようになる。そんな近未来では、新型の分子構造を持つまがい物が闇ラボで作られるという危険も止められない反面、製薬会社に特許を独占された薬品の不当に高い価格設定から解放されるなどプラスの側面も出てくるでしょう。医療無法状態もあるかもしれませんが、裏を返せばインスリンも自分で作れるようになる。そうなったら製薬会社が崩壊するかもしれないよね。

世界はその方向に向かっている。だから化学式も含めて薬物を詳しく知っておく必要があるし、毒性や依存性、オーバードースしたときの解毒法も知っておいたほうがいい。危険性を知らなければ、正しく恐れることが出来ない。要は「何をもってして人間は学び、鍛えられていくのか」ということ。「薬物乱用防止 ダメ。ゼッター」という思考停止では、ある意味一番無防備な若者をつくるだけです。

テレビは認知症製造マシン

ジャーナリストとしてテレビ業界で仕事をしていると、「テレビが真実を提供できるわけがない」ということが分かります。なぜなら、テレビのコンテンツを作っている人が世の中のことを分かっているから。

ある年齢以上の人たちはそんなテレビに依存している。さらにその人たちには免疫がないから、セカンドオピニオンとしてネットからとんでもないガセを拾ってくる。そのとんでもないガセを信じながらテレビを観る。一部のバラエティー、ワイドショーの制作側もそのガセを拾っ